

目の冒険

知覚を遊ぶ④

下條 信輔

古代メソポタミアで最初の文字が発明されたのは、紀元前3千年より前かららしい。それ以来古今東西、さまざまな文字が生み出され、数字や人工的なサインも創られた。

そのまちなちな形態から想像されるように、これらの視覚シンボルは全くランダムに発生し、定着したのだろうか。それとも、文字は目で見て認知されるためのものだから、見る機能に合わせてデザインされているのだろうか。

地を這う生き物だからこそ

私の研究室のM・チャンギン博士が世界の言語1000種を調べたところでは、文字は目の識別力の限界を基本に、多少の余分を加えて進化し定着したらしい。

例として、私の名前の最初の3文字をひらがなで書いてみよう(写真上)。「し」をもとに考えると、「も」と「じ」はそれぞれ2本の短線と2点を加えている。文字の識別だけなら、1本(1点)でもいいはずだ。だがそれだけだと、文

字がかすれたり染みがあったりする場合や、小さすぎる場合に紛らわしい。かといって、4本

を加えれば識別は確実だが、書く労力が大きくなる。つまり文字は、視覚の識別力と運動の労力の妥協で成り立っている。

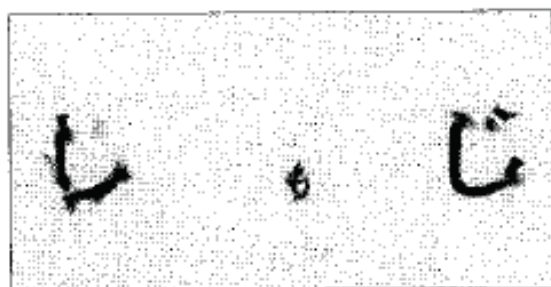
視覚系と運動系は密接に影響し合いながら進化し、文化を産み出してきた。そのつながりを示す、私が見いだした現象を紹介したい。

机の裏に紙を張り、上から見下ろす姿勢で文字

や単語を書く。考えず反射的に書けば、かなりの確率で左右反転の鏡文字になるはずだ(写真下)。字を書く面が下向きなら反転、上向きなら反転しない。また誰かに頼んで、自分の顔や下(または

外)に向けた筆^{ペン}に字を書いてもらうと、左右反転して知覚される。机の裏に字を書くときと同様に、筆が下向きなら反転、上向きなら反転しない。私たちはそれぞれ生き物として目標を持ち、感

覚と運動の座標を協調させながら地表を這い回ってきた。文字とは、その歴史的痕跡のようなものではないだろうか。(カリフォルニア工科大 教授)



④「し」「も」「じ」の三文字は似ているが、多少かすれたり、小さくても見分けられる⑤筆者自身が机の裏に書いた文字。「輪」のへんとつくりの位置関係だけは反転していない=いずれも下條研究室提供